

障がいと共に生きるアーティスト達と
そこにある世界を発信するフリーペーパー

Hugs

はぐす について

「Hug」という言葉には、「愛情をもって抱きしめる」「こだわりを守り続ける」「自分自身を幸運だと思う」などの意味があります。フリーペーパーHugsは、障がいと共に生きながら創作や表現活動をしている方々や施設取材し、その活動の様子や日々の思い、そこから広がる豊かな世界を伝えていくことを目的にしています。

創刊から福祉施設を紹介してきましたが、今年度から個人やプロジェクト等にも焦点を当てた内容にしています。またnoteでの発信を中心にし、フリーペーパーはダイジェスト版として発行してまいります。

https://note.com/freepaper_hugs/
こちらのQRコードからもアクセス可能です。



あいサポート・アートセンターからのお知らせ

あいサポート・アートとっとり展 開催

【本展】

米子市美術館 (第1~4展示室)

2024年12月21日 (土) ~2025年1月5日 (日)

【中部巡回展】

エースパック未来中心 (アトリウム)

2025年1月11日 (土) ~1月19日 (日)

【東部巡回展】

鳥取県立博物館 (第1・2展示室)

2025年2月8日 (土) ~2月16日 (日)

あいサポート・アートセンターのお仕事紹介

あいサポート・アートとっとり展の運営

障がい者や障がい者を含む団体による芸術・文化作品を公募し、展示する「あいサポート・アートとっとり展」。

これの開催に関する企画、実施計画の策定、事前準備、各種調整、広報、作品の受付・返却・運搬・保管・審査・展示、会場設営及び実施等……全般にわたる業務を行うよ!

やるのがたくさんあるね。
とっても大変!

県からのお知らせ

あいサポートフェスとっとり2024

エースパック未来中心

2024年11月8日 (金) ~11月10日 (日)



あいサポ展について詳しくは
公式サイトへ

じゆう劇場からのお知らせ

演 目:シェイクスピア「間違いの喜劇」
日 時:2025年1月25日(土)、26日(日)
場 所:鳥の演劇

Hugs 次号のお知らせ

2025年 初春 発行予定

特 集:山陰ご当地フォントプロジェクト
コラム:あいサポート・アートセンターのお仕事紹介

編集後記

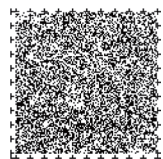
じゆう劇場の雰囲気、心が動かされた。「障がい者アートって、今でも相変わらず、がんばってやっているということが評価されがち。率直に言うとなんとなく舐められている。そうじゃない。すごいって思わせたい」と中島さん。稽古場に漂う緊張感や、時に笑いが起こる一体感。それぞれの演者が一生懸命に大きな声を出し、ダイナミックに動き、演じる姿に、目を奪われながらシャッターを切る自分がいた。そこにあったのは「人が生きる姿」だった。本番の舞台が今から楽しみでならない。

藤田和俊

Hugs 2024年秋号 vol.10 / 2024年10月1日発行

発行/あいサポート・アートセンター
〒682-0018 鳥取県倉吉市福庭町1丁目105番地2
TEL/FAX:0858-33-5151
E-MAIL:tottori.asac@gmail.com
HP:<https://aisapo.art/>

取材・編集・撮影/合同会社 僕ら
取材・編集・撮影/藤田和俊
デザイン/森下真后
協力/鳥取県



これは「Uni-Voice」という
音声コードです

障がいと共に生きるアーティスト達とそこにある世界を発信するフリーペーパー

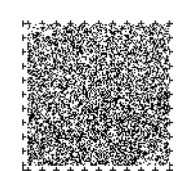
Hugs

はぐす

2024年秋号 vol.10

特集
じゆう劇場

「つながることは、
豊かさ」



これは「Uni-Voice」という
音声コードです

つながることは、豊かさ



じゆう劇場 (鳥取市 / 演劇)

鳥取市鹿野町にある劇団「鳥の劇場」のプロデュースのもと、障がいがある人もない人も一緒に演劇作品をつくるプロジェクトとして2013年に始まった。シェイクスピアの作品に障がい者の体験談を織り交ぜるなど、独自の舞台を創作。初年度以降、毎年メンバーを募集しており、これまで鳥の演劇祭や鳥取県内外、フランス・タイでも公演(今年度は2025年1月に上演予定)。

「それぞれの可能性を開く機会に」

「はい、まず歩きましょうか。ぶつからないように。視線を下げないで」
練習前のなごやかな空気は、演出家の中島諒さんの声でいっぺんに引き締まった。ウォーミングアップで舞台上を歩き回る役者たち。障がいがある人も、健常者も、子供も、大人も。じゆう劇場には、多様な人たちが集まっている。

「人間にとって自由は、もっとも大切なことの一つ。表現活動の選択肢の一つに演劇がなり、演劇を通じて他の人と関わり、それぞれができることを広げてもらいたい」

活動が始まったのは、2013年。県内では全国障がい者芸術文化祭が開かれ、障がい者アートにスポットが当てられ始めたころ。中島さんのもとに障がい者支援施設から「演劇をやりたいという利用者さんがいる」と相談があったのがきっかけだった。

「障がいのある人との演劇創作は全く経験がなく、何ができるかわからなかった。やってみてわかったのは、演じることを必要としている人がいるということ。演劇をする中で、それまで表に出ていなかったその人の魅力や可能性が現れ、周りに影響を与え、それがまた本人の喜び・自信になる、そういう循環が見えた。演劇の新しい価値に出会いました」

毎年つくる長編作品だけでなく、学校に出向いて短編を上演したりワークショップを開くなど、その活動を広げている。

「その人が持つ可能性を引き出す」

最初は戸惑いがあった。普段はプロの俳優を相手に作品を作っている。じゆう劇場ではスムーズにいかない。セリフが覚えられない、明晰に話せない、立って歩けない…。その中で、一人ひとりが何ができ、何が得意かに目をむけ、「そこに在る人の光を引き出す」という演劇の本質にじっくり向き合った。

「障がいのある人がやればなんでもアートというのはちょっと違う。私たちは、健常者も障がい者もフラットに考えていきたいと思っている。それなら、演劇として満たすべき基準の一番根本的なもの



左:じゆう劇場祭[上演タイトル]2023年、右:じゆう劇場祭[上演タイトル]2023年 提供:じゆう劇場

のは、じゆう劇場でもプロの仕事でも同じように満たされなければならない、それによって差別をなくすのだと。それを参加のみなさんと共有しています」

良い作品をつくることにこだわってきたからこそ、障がいがあることを理解しつつ過度な特別扱いはしない。そんな中島さんに呼応するように、誰もが練習に真剣に向き合う姿があった。

「行政の福祉サービスは、その人の限界を行政が決めて支援内容が決まる。アートはその逆。その人が本当はできるかもしれない最大限を見る。物語や他者との関わりの中で、その人の中に潜在していた可能性を引き出していきたい」

声が大きく出せるようになり、できなかった動きができるようになり、表現がどんどん豊かになる。演者たちの変化を見るたびに、人が持つ無限の力を感じる。

「演劇を通して、家族や施設の人のコミュニティーだけでなく、もっとたくさんの人と関わる。本番が迫ってくる中で高まる緊張感や責任感も加わる。そういう刺激が人を成長させていきます」

鳥取市の和田尚也さんは、母から勧められたのがきっかけで参加して6年目。

「なんとなく楽しそうだなと思ってやってみた。いろんな人がいて、みんなでまとまってやるのが楽しいし、達成感がある。あと、声が大きくなりました」

と、笑顔を見せてくれた。



台本の確認をする和田さん

「障がいの壁を溶かしてゆく」

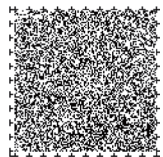
「人は誰も差別意識って心のどこかにあると思うんです。私にも、消しがたくある。それが演劇をやっていると、揺らぎ、溶けていく感覚があるんです」と、中島さんは言う。

「人の喜びには二種類がある。一つは、人を差別することで得られる喜び。もう一つは、いろんな人とつながり、壁がなくなる時に感じる喜び。両方とも喜びだが、どちらが本当の喜びであるかは言うまでもありません。じゆう劇場に参加する人、見に来られる人は後者の喜びを感じてくれている気がします」

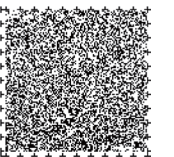
今年の作品はシェイクスピアの「間違いの喜劇」。これまでは原作に少し手を加え、出演者の個人的な話をさし込んで「障がい」を強調してきた面もあった。今年は原作に忠実にやることに決めた。

「演じるということはその世界を生きること。間違いの喜劇で言えば中世ヨーロッパをみんなが生きる。その中で、それぞれの内面的な豊かさに触れられる瞬間があって、見ていて素敵だなあって思う。そこでは、障がいという壁が消えているんです」

人間ってなんだろう。生きるってなんだろう。その本質に触れられる演劇がここにある。



これは「Uni-Voice」という音声コードです



これは「Uni-Voice」という音声コードです